

魯董集

卷之二





●若小引る。中古近古の書どもあり。假字のころえぬもかわりれどその  
 まくにちりて。ほつりて。意をもちらひど。古書のころえを夫のみ  
 ちのひざればなり。又字音のかわりたる言も假字のたぐると  
 かわれる。いりせん。他はあつてつれづれをあらたむにいつて  
 めぐ。又字をさかちあまをもあやめるべし。○是等のかもびきあつて  
 べんごあり。凡例はつづらるれども。板に雕るのつて。書賈前帙二  
 巻ごとくせよ。弘くんとて。つれづれにわかれ。むとを得也。後帙の  
 巻首に載へくあり。つれづれに次へて。つれづれをさるるべし。

○後帙目錄

▲下之巻前

- ① 球杖考 打毬樂圖古製
- ② 端の考 碓毒團
- ③ 羽子板考 今製
- ④ 粥杖考 北越の板木の圖
- ⑤ お乳母日傘といひ諺の原 羽列のちたけ棒の圖

- ⑥ ひなの名義ひなの假字
- ⑦ 離遊のよめ
- ⑧ 離社離合
- ⑨ 源氏物語の離花
- ⑩ 古書にも小見え
- ⑪ 離花
- ⑫ ひなの調度
- ⑬ 土
- ⑭ 室町家の比の離園
- ⑮ 伊勢の小米離
- ⑯ 古製離園
- ⑰ 離遊
- ⑱ 三月三日小倉
- ⑲ 唐の時三月三日饅人あじ事
- ⑳ ひなの繪櫃
- ㉑ 昔の質素
- ㉒ 離花の
- ㉓ 九享保の比の土離園
- ㉔ 離の使園
- ㉕ 離梳折敷園
- ㉖ 離の考
- ㉗ 離丸の離
- ㉘ 離
- ㉙ 離

▲下之巻 後

- ① 子日の離遊
- ② 贖物のひい
- ③ 菊進比丘尼の繪解
- ④ 屏風の古画
- ⑤ 端午の茅卷馬



庭訓往末より前の物もくんとしひらく

○(辛) 無木といつる物の再考。十訓抄 鑑囊抄 未だ考へたる元未嘗のことなるを前より考へて諸書を参考して筆墨をたす

○(廿) 一二の再考。前より長門本平家物語を引いて再考す

○(廿) 根本雑事再考。此経の本名の根本説一切有部毗奈耶雜事と云

卷第十六小猕猴投果の事ありて佛與天受の語あり 義楚六帖の大一

畧文より異同ありゆゑ小これをとらざり。此外は再考ありしをこれより

以上後帙二冊来乙亥春發行

○(前) 前帙二巻の引合からいへるる草紙繪物語のたひりれど近古

物ありしをいへるるもまことな事なりしをいへる。當時を考ふたつた

あきまうものいへるるあれ識者の看小あつたりのあつたその昏目を考ふ

○(後) 後帙二巻の引合から古書を引つれどいへるるわかれられもことごとく昏目を考ふ

いへるものいへるるに述杖がまゝに 粥杖離遊考の引書をたよ奉て  
前帙二巻と趣の異なるをまゝに 但書書籍の年序よりいへる引  
用の次よまゝにひてあるなり。

▲ 述杖ゆりりの考引書

- 萬葉集
- 事物紀原
- 源平盛衰記
- 袖中抄
- 遊学往來
- 下学集
- 鑑囊鈔
- 本草啓蒙
- 續日本後紀
- 遼史
- 平家物語
- 日本歳時記
- 訓蒙圖彙
- 和漢三才圖會
- 三才圖會
- 和名鈔
- うつほの物語
- 義經記
- けれく草
- 源氏物語
- 中山傳信錄
- 滑稽言雜談
- 年中定例記

以上十四種

▲ 粥杖考引書

○清少納言草紙

○袂衣

○増鏡

○下紐

○日次紀事

○日本風土記

○年中故事要言

○和訓栞

▲ 雛遊考引書

○和名鈔

○契沖雜記

○日本紀

○釋日本紀

○古事記傳

○齊宮女御集

○源氏物語

○うつろの物語

○袂衣

○さそひばや

○紫式部日記

○清少納言草紙

○弁内侍日記

○日本歲時記

○婦人養草

○簾中舊記以上  
三種

○玉かほま

○厚顔抄

○中琴集

○紫花物語

○増鏡

○濱松中納言物語

○あけろゝの日記

○雛遊記

○盛衰鈔

○拾芥抄

○無言抄

○御傘

○加茂保憲女集

○国朝佳節錄

○名物六帖

○雍州府志

○鋸屑

○其袋

○土左日記

○日本歲時記

○諸国奇遊談

○昔ニ物語

○滑稽昔雜談

○五元集拾遺

○和漢三才圖會

○春曙抄

○丹後守為忠家百首

○婦人養草

○女用花鳥文章

○江家次第

○古事記

○世諺問答

○増山の井

○文昌雜錄

○五元集

○續狸蓑

○女用訓蒙圖彙

○本朝食鑑

○朱ひくさき

○異本和泉式部集

○羊中風俗考

○日本紀通證以上  
五十四種

○名古屋帯

文祿前後より寛永の比はその古画と見え男女共に絲と絹と一纏と似たる  
 両より小総とつけたるといくも見なくまいて帯にたる体ありきと見え其色の  
 白あり紅あり青黄赤など成体にて彩色と見えあり按て是はゆる名古屋  
 帯あるべし昔肥前の名古屋帯は唐糸とて組するゆふ名古屋帯と見え  
 又組帯といひしと或人いす和名鈔腰帶類云纏帶和名加良織絲為帶也  
 とあり加良久美の韓組と名古屋帯は韓組の遺制と見え又源氏  
 梅枝の巻は「なんのつゝもれひも」とつて見えたりは巻物の紐といひ  
 和名鈔服玩具云四聲字苑綾青而黄也」は文祿前後は古画は青黄  
 赤といふりたる組帯ある是則綾にたるとも帯なるべき歟

一代男

天和二年 二之巻云「小塩山の名木落花らるる花今ひひことし

一、男達其比は捕手居合しやうく世の風俗も糸髪ふしと見え二すは  
 挿れ髪上髷のくして袖下九寸たる漆分の組帯と見えけの長股指ありと  
 れり人形は是王城小住人の有様今はく昔と捨るなり北野の詣で  
 梅より大谷小行て巻と一折鳥部山の煙し五寸つきの吸筒小者  
 へん毛巾着ひひひひひをありと見え文音繪と見え其比は慶長元和乃  
 比と見え此一代男は西鶴の作なり此人の寛永十九年の生きたり幼時  
 びれきれたる成りたるなり證するなりと見え漆分の組帯は紗乃の  
 らの帯のゆふ歟當時は男がてなるとも組帯といひたりと見え同書五之巻  
 小筑前折町の事と見え組帯屋といふ名目見えり當時は筑前少くも組  
 帯と帯一たるなり○さて劍の名古屋帯は便利かきゆふゆふ寛永以後はや  
 すられたるも貞享より享保の比乃草紙と見えは性見えり組帯名古屋

織の帯。糸打の平帯。名古屋打の房帯。かごとくもの寛永以前の古制の如き丸打火  
ゆいで平打して今云糸と云ふは類なり

**万金産業袋** 享保十七年印本 卷之四小云「名古屋織男女の帯糸さかたれくあり女帯は総つき  
幅四寸半の男帯は幅二寸五分半の丸糸さかたれくあり六尺一枚ありさかたれくあり名古  
屋織といふは袋打なりいづれも夏帯なり」とあり古名のりなり古制より古制より古  
く代知るべし

○再按に「竹齋物語」寛永中「お云折ふ上人ら集りてそれききうたふゆりしとき  
出たりと云ふややくやくいふややくいふをいふれどもひきかかれあり成り上より藤子れき  
とく再び袖よりとまへん湯衣ひひりめん帯へ天下にやくいふに二条通は百足屋々  
上よりぬれ湯帯とてえりけ心とつらつらんは帯の八打は金おやまをせりしれり  
云に「やくいふ」組帯れとてふれ或上人の袷束とてふ糸とてふ藤子れき帯の  
は小袖とてふ成りてけり不當時の女は袷束はむむとて戲作かへりしとて

今も「」の僧丸帯とて式正のものとするべしなりを組組の帯は僧家まで用ひ  
なり既ふ利休の像と画に組組の上帯と道服の上帯なり 竹齋物語に寛永十一  
年十二月三年の比は作りな  
り 御伽婢子 寛文六年瓢水子浅井  
了意作元禄十一年刻卷之四「天正年中越前教賀金銀や  
かみ持する商人一人は男子とわくありなり其隣に住有徳なる商人の娘と娶て妻よ  
とてさき給とてけりしれり」 真紅に擊帯とては娘よとてつらつら「」の  
ゆいころ。按よこれ原「勤燈新話」の金鳳釵記と翻案したる物語なれども金鳳釵  
真紅擊帯につらつらて天正年中これ「」たる當時此帯より用ひて年寛文乃  
比すをいひつてたるゆゑなりを一洗に依り

○火燧

火燧といふは其の迹古にて是るものなり火燧のなれ以前に物に死けて火鏝を足を燧  
たりし古き繪巻に其体と云ふありあり「」に置かれ左に其出でり

**下学集** 杖火燧れ名目見を依 **尺素往来** 不竹燧生炭木床を依風雪と洵にあり



て火燧のこゝろをいへば文安文明乃比まほ火燧といふのありしやるを

饅頭屋節用 文龜中初刻「火燧火踏」のくはるをいへば按はく火燧の文明

以後ふんぞねーもあなまへー ○今も唐土の此方火燧の如く炉上は積とて

覆いしやるもや 清俗紀聞「冬は手炉と用ひ極寒中を手足冷る時脚炉は

火を入れて灰と覆ひ椅子の前或は睡床の前は畳に足と其上は畳に温る云々 地炉

石炉といひく此方の巨燧の積地は炉と拵て置たりありこれ南方温暖は土地

用ひとていへば 行雨集「煖手者曰手炉煖足者曰足炉」清俗紀聞「脚

炉は是なるべし 或は按は火燧の地火炉のありなきは地火炉は「宇治拾遺」

見ざる。又 奥列後三年記「永保の比陸奥地火炉ついで」のありしやる

いしやるもの此地火炉比制りありて火炉となるを大炉といひは積をつくり

やぐらといひかゝる櫃と名づけし成とてこれを戦国の時比制りあるに居

櫓に形に似たるゆゑに名まへりしやる

○名古屋帯古圖

按はくこれ寛永以前の古圖なり當時は童女にひくれ如ききり髪れりゆゑに各り



○衣服の總括として 紫華の足袋とて 二百年前の古風 眼前よりいへば

○此時代の總括として 此時代の總括として 此時代の總括として 此時代の總括として 此時代の總括として





の条軍用乃て之を以て所は小荷駄馬一疋に挑灯二つを以て結付馬負れり一入  
小一づく續松りて之を以て所は之れを當時に挑灯はもて軍用よりたひたる  
元龜 天正 或古説ふ永祿天正の比に籠挑灯も今世にたひたるに挑灯は之れ  
とて文祿 慶長 好古日録ふ俗に云箱挑灯ハ一の時始て制す上下と藤葛を以  
編たり板と用ふ慶長以後は事とて天正已前ハ挑灯ハ籠に紙を粘して用也醒云  
左のわらをもて此説は右に古説と合せ考まはれむ挑灯ハ天正以後は物さへ一  
元龜 天正 慶長 五吟我集 未得 葉 天正 慶長 承應 明曆 享和  
狂歌あれを既々當時はつと挑灯もふもはれり 承應 明曆 享和  
草紙に於て後々もて竹に九き挑灯とてけり持くり今の高挑灯はたぐひあり  
手挑灯ハ人々もて 方石 前文 訓蒙圖彙 寛文六 小九き挑灯ハ柄とてつたり今や  
挑灯もふもはれり如く 水鳥記 寛文七 年印本の冷ハ棒に之を箱挑灯あり 俳諧夜錦集 寛文 乾坤乃  
箱挑灯もて月保文 句もはれり當時ハ箱挑灯を以て用ひあらん

延宝 延宝六年板 菱川繪本 箱挑灯ハ柄とてつたりものあり當時よりもこれと用ひたり  
とて之の 隱菴 延宝五 附合れハ小 抄りハの煙ヤとて挑灯 といえ之れを當時ハ懐中挑灯  
とてあり一もて之を當時ハ高挑灯ハ九き成用ひたりとて之のれと提ありく 提灯ハ  
之のりハ但神事華送ハ九き成用ひたりとて之のれと提ありく 大和 貞享 元祿 當時に  
印本に草紙の繪と参考すハ延宝より元祿に本を以て柄に之を箱挑灯と用ひ  
棒とて之を箱挑灯ハ之れより 雍務府志 貞享 文正 并挑灯之類悉張版之 といり  
一代男 貞享三 卷之四民家ハ婚禮の晝ハ柄に之を箱挑灯と持り行体とて之れハ式正  
小も用ひたる一 室永 柄に之を箱提灯ハ之れとて之を以て不便とて之れ  
なれどやとて之れもや當時より棒とて之を箱挑灯の之れ成用ひたり 正徳 和漢三才  
圖會 小棒とて之を箱挑灯と出さ 享保 西川祐信の繪本其外當時に冷とて之れ  
えとて棒とて之を箱挑灯と用ひたりとて享保十七年ハ印本 万金産業袋 卷之一 挑  
灯ハ類とて之を条ハ馬とて之を細書 鯨ハ之とて之れ如く見たりとて之れとて按今



寛文七年印本

水鳥記  
野載



○當時ハコレ如ク  
櫛乃ガ尺箱挑灯

延宝の比

元禄未だ此如ク  
栢トリタル箱挑灯トリタル  
當時此俗ハ有リ

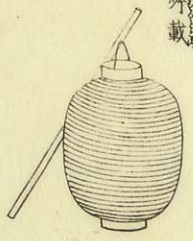


西鶴大鑑  
貞享四年撰  
巻之二秋柳燈ト  
ハカクニセウ是ノム

元禄八年  
李繪百人一首  
野載

寛文六年印本

訓蒙圖彙  
野載



今俗ハコレ挑灯ト  
ハカクニセウ

元禄五年印本

胸箒用  
野載



○此  
ハ栢トリタル  
箱挑灯トリタル  
當時此俗ハ有リ

元禄十五年印本

諸藝大平記  
此書あり



○當時コレ如ク  
栢トリタル箱挑灯トリタル  
當時此俗ハ有リ

宝永五年印本

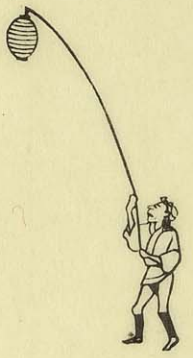
諸士百家記  
此書あり



○當時コレ如ク  
栢トリタル箱挑灯トリタル  
當時此俗ハ有リ

万治四年印本

野載



○行燈

行燈ハ始詳ク下学集  
文燈箒行燈挑燈  
鎌倉年中行事  
徳子行列  
徳子行列  
徳子行列

松行燈ト持テルモノ  
燈火コトハハ  
風トモセテ持テ  
造出タルモノ  
然則字義

骨董上編 中八

りて民家、端近く風く多しゆぬに灯火おむらひるが便しきを後小燈臺ことうだいといふ  
 用ひたるものなりとて永正御撰何曾えいせいごせんなにそうのころに法僧ほふしゆうが寮しやうの物ものを手にしてりとの人を  
 何人なにびとと解と何曾なにそうより法僧ほふしゆうの寮しやうの物ものを手にしてりとの人をとて古言こごんをば  
 下学集げがくしゆうの行燈ぎやうとうとつゞけつひた後上木ごじやうきをる時乃ときももる人ひと一貞徳いちていとく乃御筆ごひつ  
 小こ行燈ぎやうとうとつゞけつひた

玄峰集げんぽうしゆう 依見よみ鐘木町かねきまち燈とう松まつ多おほく燈臺とうだいとつゞけつひた  
 依見よみ鐘木町かねきまち燈とう松まつ多おほく燈臺とうだいとつゞけつひた

乃な燈とうてて東あづまの夜よ乃な月つき乃な嵐あらし

わく之れを鐘木町かねきまちの燈とう松まつと用ひ元禄げんろく比ひの行燈ぎやうとうをそとらりしひひりひひり  
 翁草おきなぐさ 卷まれ五ご云い古老こらうの物語ものがたり今いま此こゝ世よに在ある調てう度どのいへり皆みなあるまじやうに  
 なふわの行燈ぎやうとうなるものありし今いま此こゝ世よに在ある調てう度どのいへり皆みなあるまじやうに  
 行燈ぎやうとうれ如ごとく燈とう板いたの燈とう臺だいと置おけられたる遠とほ州しゆうとて丸まる行燈ぎやうとうを足あしをける角かく行燈ぎやうとうに燈とう  
 臺だいと中に納なめ始はじめなりき此こゝ説せつれ如ごとく行燈ぎやうとうれ古こ製せいの今いま茶ちや人の用もちる廬い地ち行燈ぎやうとうと

物ものとてよく知しる一ひと其その製せい作さくた歩あり便べんしきと元家げんか内うちにと置おけられたる造つくり

れは元禄げんろく二年に印いん本ほん 本朝ほんてう櫻陰おういん比事ひじ  
 挑た燈とうれれののひひののひひ

元禄二年印本  
 本朝櫻陰比事  
 外載がいざい語ご

當時たうじ近ちかき頃ころよりとありしものなり如ごとく  
 行燈ぎやうとうと用もちひし今いま諸國しよこくの行燈ぎやうとうと製せい作さくの  
 用もちひしものなりとて二十四じふに五年ごねん前まへの  
 上うへの製せい作さくの行燈ぎやうとうと用もちひしものなりとて  
 行燈ぎやうとうと用もちひしものなりとて



今茶人いまちやにんに用もちる  
 燈臺とうだいの  
 形かたちとつゞ

笠かさ比ひ下した布ふと垂たり

秋齋問語あきさいもんご 室曆しつれき三さん 卷ま之の二に小亭せうてい祿ろく二年に比ひ古画こがわと載のり左ひだりに如ごとく今いま案あんの主人しゆじんに女に  
 祇衣ぎいやれりふ市いち女に笠かさとてそのつひの女に下した女に手てぬくひのそとにひひり  
 布ふと頭かぶはりし其その不ふ笠かさとてつたり職人しやくにん歌合かがひの女に頭かぶはりし布ふと列りる年とし

秋齋問語  
所載古祿  
二年古画

享祿二年々々今  
文化十年より  
やを二頁八十五  
年此昔なる當時  
の女は形體のく  
なを此畫密画  
よりうまれを其  
おしむと  
又ハ一

このふ作假名を  
おしむと  
秋齋問語乃  
まこと奉り  
たえ

○寛永時代古画  
此畫と載たり



此畫は寛永時代  
の女は形體のく  
なを此畫密画  
よりうまれを其  
おしむと  
又ハ一  
此畫と載たり

下向ノ下女ノテイ  
ナルヘシ袋ヲモタ  
スルハ古風ノ一々

ソハツカヘスル女トミヘ  
タリ下女ハカミヲサゲ  
ソハツカヘテイハカミヲ  
サクルトイトヘトモカ  
ワラハカケタリ

主人ノテイ今ア玄  
カツキテイノモヲヨキ  
タルカウニキタルハ大  
ウチキノテイトミヘタリ  
市女位立ハカミノソコ子  
カルタメカ

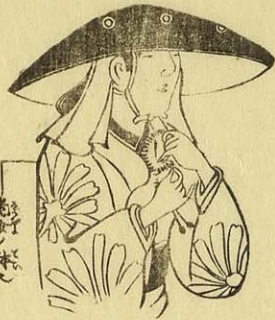


京山撰寫

○香花園藏本  
寛文二年印本  
要石  
内載



○詞花堂藏本  
天和四年印本  
葵川の傳  
此畫あり



此畫あり

○これ等古畫と参考す  
寛永寛文天和此畫は  
その人の形體を  
これより見るに  
此畫乃遺傳  
此畫の形體を  
見るに  
此畫の形體を  
見るに

此畫の形體を  
見るに  
此畫の形體を  
見るに





當時の塗笠は足袋共々よく古風なりしと云ふ  
同書 水口八兵衛より此地  
へたら塗に千とむらさみの紙紐と付たる當世振ありの  
安永乃此昔小町の塗と  
なりしものなり

俳諧日本國 元禄十六年印本

附合の  
九  
塗笠  
まき  
まき  
重  
灰  
重

是書も當時塗笠はもとより一證之松の葉  
元禄十五年印本  
なり塗をひきたる  
七人くちのとりまふておめまらん。ゆへに塗笠のこのまじりもあつて  
まじりて

花見車 元禄十五年印本 松蘿館藏本

初子やふくゆいなる女子は月

和漢三才圖會 塗笠 用薄片板紙張之漆黒色出於京師及大坂 同書 越前國

土産之部 塗笠出於 我衣 古老は和紙と固まいたる 小兒は塗笠の小ぶりありて内は

牡丹梅椿水仙桔梗燕子花等と画たり 紅あざと白糸と引通しを信云々

○寛文二年印本 江戸名所記 所載 石なれ かに よなり



貞享の頃の 繪 此畫 あり

孔雀樓筆記



○當時ハ 塗笠 出於 同書 町載



昔は礼儀なり

地無 小袖お あり あり

○反故堂不登延宝時代



○延宝は此の塗笠

○貞享四年印本 武道傳來記



○女つひれ女

骨重上編 中主

○天和四年印本葵川師宣比  
 繪は昔の當時の如く  
 綿の頭面とつらつら  
 中半少女又老女  
 古く見え



大和名所鑑  
 所載

天和貞享  
 元禄比花女繪笠形  
 寛文延宝比比ひんて変じるとも各  
 當時ひんて絵とよつたへあり襷比  
 少女に葵川比繪さるるをさるるゆふなれと  
 比女子の手とて男子よりより又文字と  
 比女子の手とて男子よりより又文字と  
 比女子の手とて男子よりより又文字と

元禄二年印本  
 本朝櫻徒比事  
 所載



○元禄二年の如く  
 比下たるをいふと

○物類称呼  
 柳帽子  
 比花女が  
 こまの腰とふ肥後  
 てがそのへへ脚  
 こまの腰とふ肥後  
 てがそのへへ脚  
 こまの腰とふ肥後  
 てがそのへへ脚

和漢三才會  
 比男子比笠  
 比男子比笠

○桔梗笠

天子草 寛永十年刻 衣 桔梗笠 徳元  
 花吹草 正保四年刻 也 桔梗笠 吉政  
 玉海集 明曆二年刻 也 桔梗笠 喜雅  
 百三似草 明曆二年刻 也 桔梗笠 作者不知  
 物志草 明曆三年刻 也 桔梗笠 蝶の子  
 歌修草 寛文五年撰 以上六部在歌堂藏本 作者不知

右に如くすは俳諧に句集に桔梗笠は古くは當時よりさるる笠なり  
 とらねりひぬれといふ句 形れものともさるる古くは左の古圖と得て其形を知らぬ。又  
 山井井 慶安元年刻 著作堂藏本 小も 桔梗笠といふの如く花に似てくは人目も比草の如く  
 比男子比笠 比男子比笠 比男子比笠

桔梗笠古圖

貞享の比の繪は此圖より

大神樂打の  
体之



元禄の比の繪は此圖より



此二人  
美少年の  
君子の体之

天和貞享の比に幼れは乃繪巻の  
うらふ此圖と載たり蓋は青黄赤  
一間おんいへらり



大神樂打の  
少年の体之

○浮世袋再考 九

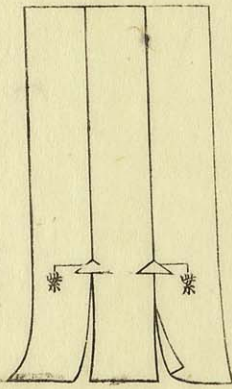
沙金袋 山本西武撰  
明曆万治此刻

塵れく 浮世袋や年乃それ

蜀西

此句とりて之を考ふに浮世袋の勝れたるひる久し  
火打袋と三角は徳田名小紙子又火打の名なり  
此説ふれば三角は徳田名小紙子又火打の名なり  
何れも浮世袋も三角は徳田名小紙子又火打の名なり  
卯子酒 宝永六 卷之三 昔九軒田の縁昌一乃  
事なるる葉小 亮が浮世中なるる物と叶ひるなり  
後みまきも 村一かなへ

○ 昔は女狐の布を縫う浮世袋とつけりといひ  
此袋は下くの小ふりこれ徳田名小紙子と三角は形に和  
つゆが浮世袋の形に似てゆきとて名をたすなり  
右のうらふ此圖は如きの書之をたすなり  
此袋は下くの小ふりこれ徳田名小紙子と三角は形に和  
つゆが浮世袋の形に似てゆきとて名をたすなり  
右のうらふ此圖は如きの書之をたすなり



骨董上編中十四

本朝俗語志 延享四卷之三云云 今傾城町北邊麓ふはれ乳とゆふく乳守れ外ふか(云々)をを

○又童女れけ葉(云々)ららんふふ(云々)ゆふとて(云々)ゆふり(云々)ゆふ(云々)粟津れ津(云々)三浦れものを

○又於女ふたり(云々)浮世(云々)の(云々)慶安明暦元禄れ比(云々)も(云々)り(云々)吾吟我集

慶安二年(云々)序れ(云々)文(云々)何(云々)人(云々)れ(云々)衣(云々)著(云々)一(云々)衣(云々)ひ(云々)小(云々)か(云々)ど(云々)れ(云々)の(云々)重(云々)化(云々)れ(云々)拵(云々)ふ(云々)と(云々)

如(云々)云(云々)云(云々)云(云々)

新續天筑波 七々 けまじり人跡(云々)ゆへ(云々)き(云々)ま(云々)ん(云々)ひ(云々)り(云々)か 正信

俳諧糸屑 元禄七 哀之部(云々)世(云々)世(云々)世(云々)の(云々)小(云々)名(云々)目(云々)と(云々)出(云々)り(云々)是(云々)等(云々)ど(云々)り(云々)て(云々)護(云々)と(云々)ん(云々)一

きん(云々)ト(云々)む(云々)こ(云々)の(云々)ふ(云々)男(云々)の(云々)い(云々)言(云々)ふ(云々)也(云々)の(云々)ト(云々)也(云々)婿(云々)と(云々)の(云々)り(云々)れ(云々)人(云々)ト(云々)や(云々)れ(云々)り(云々)て(云々)云(云々)と(云々)の(云々)ふ(云々)く(云々)り(云々)

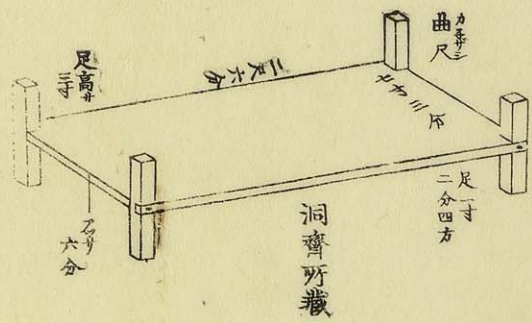
これ(云々)當(云々)世(云々)人(云々)と(云々)の(云々)か(云々)如(云々)一(云々)岩(云々)佐(云々)氏(云々)と(云々)浮(云々)世(云々)又(云々)兵(云々)衛(云々)と(云々)の(云々)ひ(云々)も(云々)當(云々)世(云々)様(云々)の(云々)人(云々)物(云々)と(云々)馬(云々)さ(云々)る(云々)也(云々)

あ(云々)ん(云々)又(云々)案(云々)る(云々)ふ(云々)貞(云々)享(云々)の(云々)比(云々)の(云々)け(云々)物(云々)乃(云々)本(云々)也(云々)浮(云々)世(云々)並(云々)あり(云々)雍(云々)州(云々)府(云々)志(云々)頑(云々)享(云々)小(云々)浮(云々)世(云々)淫(云々)座(云々)ゆ(云々)り(云々)

江戸室町の横町と浮世小路といふも昔浮世坐浮世淫座かといふなりといふも賣(云々)の(云々)多(云々)の(云々)多(云々)今(云々)も(云々)其(云々)た(云々)ら(云々)ぬ(云々)れ(云々)商(云々)人(云々)の(云々)れ(云々)た(云々)り(云々)

○奥板の古製

文朝時代の酒食論(云々)の(云々)画(云々)卷(云々)又(云々)寛(云々)永(云々)時代(云々)れ(云々)繪(云々)は(云々)此(云々)奥(云々)板(云々)の(云々)一(云々)種(云々)の(云々)古(云々)製(云々)と(云々)い(云々)ふ(云々)今(云々)も(云々)京(云々)都(云々)れ(云々)舊(云々)家(云々)の(云々)ま(云々)れ(云々)の(云々)り(云々)好(云々)事(云々)の(云々)文(云々)書(云々)か(云々)ら(云々)う(云々)て(云々)又(云々)甲(云々)州(云々)れ(云々)民(云々)家(云々)ん(云々)今(云々)も(云々)これ(云々)と(云々)用(云々)ら(云々)る(云々)表(云々)も(云々)奥(云々)板(云々)と(云々)同(云々)し(云々)る(云々)類(云々)と(云々)扱(云々)り(云々)た(云々)り(云々)の(云々)と(云々)す(云々)



○大津繪の佛像 十一

元祿四年芭蕉粟津の無名庵より一時正月四日か

大津繪に筆のくしつたへ何佛

口をさめたりそふふ古の像と画くとすくやと知る下當時は大津繪に仏と持仏に掛る老れゆくありゆ多ふれづつ大津繪のくおころも戯画にさるふなごころへーさんだこそ當時左に下く宛かゝるありなれ

俳諧日本図 元祿十六年印本 杏花園藏本

前々 附々 (遊分) 大津繪のふ後並と標世 一聯 撃林

本朝諸士百家記 宝永五年印本 卷之八ふ云大坂長町七丁目小園庵屋善三郎くつ小若河の此大津繪の裏店に罷関くやい七十有余此老法師有り中畧半ば有り此欄と爲て大津繪の三きよとかけ一首の讚よ

法ふくもまにさるも泳池の泳池未来たれんへいづくのまね

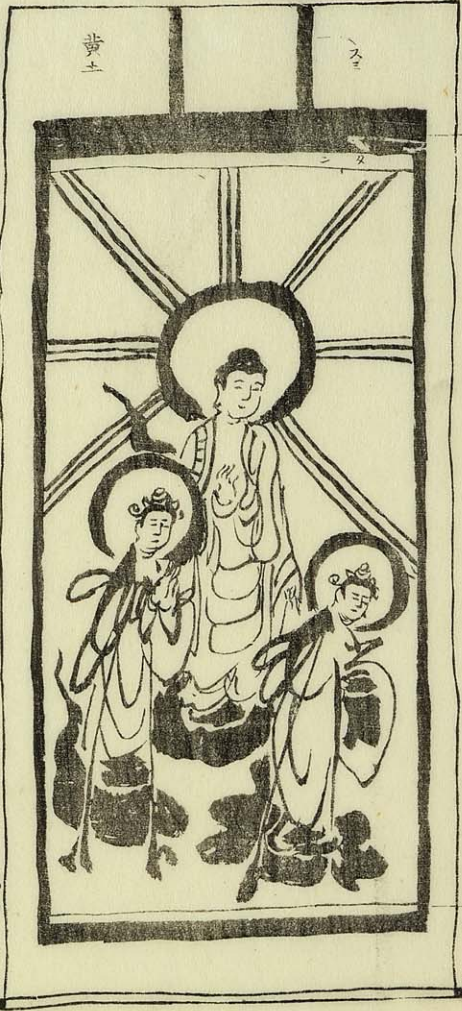
○又享保十一年竹田出雲が作せ伊勢平氏年々鑑と浄瑠璃は大津繪の十三佛といふこととこれ宝永の比までもかの仏繪と用ひ享保に比まてもまを散在せしものあふれを今へさえて見るとか一なまゝ或人比まざる摸くたよるべき但今も大津ふ仏繪多しといへる昔にといさうたなり

○因ふ云一代男 天和二年印本 詞花堂藏本 卷之三小寺泊れ傀儡の家たまといふ条は「屏風乃

押繪と云ふを花くみくを燈籠あり人形板木押の弘法大師繪に嫁入後金園左末の多門店左末門を連奴これから大津追分よりくもこのぞうりく都あつてくも云い」のほど天和に比ひ戯子繪ともいふなり

○又五ヶ條津の草紙 利根元年号 辨かへくこと 卷之四「法虎梅竹左字よまをく

枕屏風追分繪に奴の露の傘と君ふらべいし赤丹してまをくふ後てまをく」あやそ筆と標は今昔と失ひるもの大津繪と昔と共ふり並さるる女はねの花はさるるもさるるやうに繪はれと考ふべし



同三尊来迎佛

ころも黄土。輪後光丹。蓮華丹。綴音。雲朱墨。寸尺わじ。林前まわす。

尚志堂藏

有九諸士百家記。はんをる。屏関くわ。狂歌。三尊像。此さひあふ。

骨董上編 中十七

洞書院 齋院



大津繪佛像縮圖

總長曲尺二寸。廣七寸五分。薄。

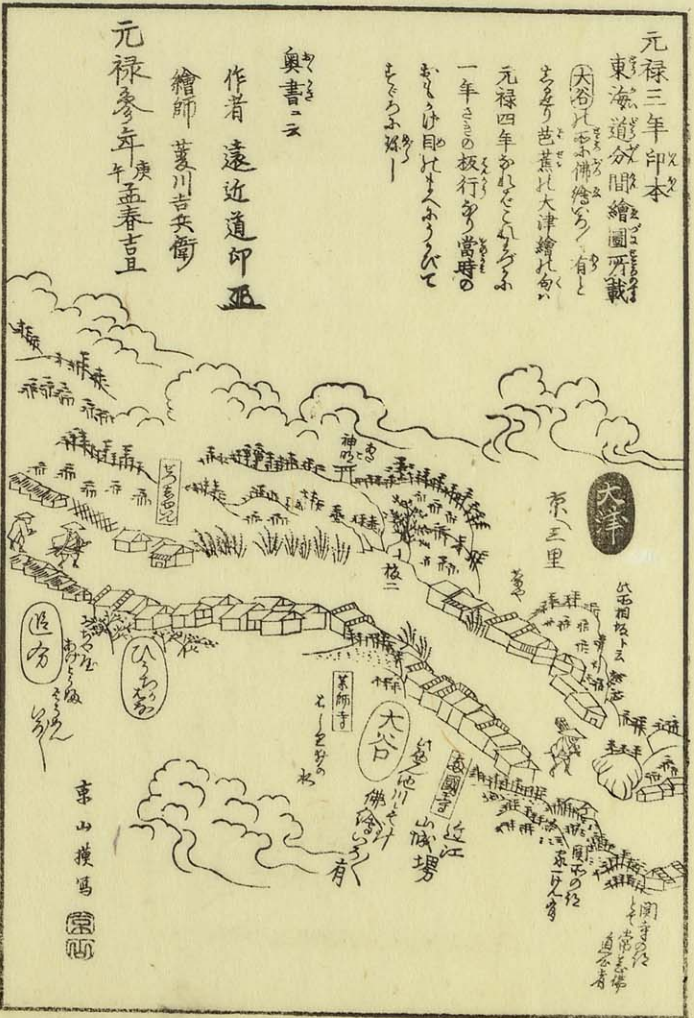
頭と両手ハ木ふりて印。林ハ筆。そ。た。ころも薄墨。輪後光丹。蓮華丹。綴音。

一枚の紙。小上下。中。一文。雲。風。帶。此形。と。彩色。よ。ま。り。て。構。軸。よ。ま。り。の。り。

芝峯軒所藏

天津信田

白



元禄三年印本

東海道放圖繪圖所載

大谷に佛堂あり有と  
 ちなり芭蕉比大津繪此句  
 元禄四年おれとていふ  
 一年さきの板行多り當時の  
 おもひ即れ人ふうて  
 むらふ

奥書ニ云

作者 遠近道印 巫

繪師 菱川吉兵衛

元禄参年庚子孟春吉旦

○浅葱椀 十二

昔浅葱椀より物有り 右之双紙 慶安二 卷之上 青と相化品く 之より糸より

此繪のり 打だまつれん 何さきこさ云に 一とくそくへん 慶安乃比既あり 物有り

雍州府志 貞享元年 梓土産門云 二條の南北新回所製 縹椀と云 黒漆比上縹

色并赤白の漆とて 花鳥と 縹云云 原書漢文 ことして其制作と云 二代男

貞享元 卷之四 富さ老の事と云 糸云 京のり 想とあさく 相の静か 向ひ

年印本 下屋敷 二百人 前の浅黄椀 三町より 牡丹島と云 一とく我より自由 花車よま

てのり 鼻も人ふく 肌も 斐見く 居て 云云 一とく 浅黄椀 下品 乃器 小

何さきこさ 俳諧糸履 元禄七 年印本 浅黄椀と云 出され 當時もく 用ひ 云云

晋子十七回 氷と著 享保八年刻

前々 子小少人 たりと 乃のひもを 生 竿秋

附夕 名ふも 似む 好き こと ぬれ 浅黄椀 雪点

晋董上編中丈





山の井

慶安元年印本

卷之五 新黒谷花見の刺

よつてのつとまはひりふれさしれ〜と云ふゆゑなり云々  
抄録より作とつてりとのちわゆ 近世好事は古之葉と盛〜  
硯箱は蓋よ香と盛〜始と有りてつひ一種は香知はかり〜  
硯蓋ハ式正ふ用ゆる筈にあらん今民家にて正月屠蘇酒は香と重箱  
へ宝永以前れ古風れ残るなり

三尺猿

文考撰上梓れ年号あり

著作堂藏本

附合れり

菊れ香に菓子とりまてて硯蓋

蘭小

硯蓋

菓子と盛〜近〜

本朝諸上百家記

宝永五年印本

卷之五 云々

硯蓋は菓子と盛〜近〜  
硯蓋は菓子と盛〜菓子と盛〜菓子と盛〜菓子と盛〜  
香と盛〜一種は香知はかり〜宝永以後れ半なり〜  
今と聞けれ形よ造りて

硯蓋し林よ原と〜

二足三文

今物れ價の安〜二足三文〜  
刻梓の年号あり〜寛永の  
昏し〜下之巻よ〜  
狂歌と載り金剛草履れ〜  
蘭金剛葉金剛板金剛種なり

三線鼓弓れ古製

松比葉 元禄十 六年板 永禄の比琉球より地皮二絃れ楽器と流を泉州塚の琵琶法師  
中小路〜者一絃と〜三絃と〜世よ〜呼寛永よ〜盛  
〜左よ模出〜寛永正保れ比の古國之永禄より寛永よ  
〜六十余年なれた古製と存〜今と大異〜  
名匠少〜今の形よ〜  
○元〜三線〜  
骨董 上編中二十

寛永正保比乃古画なり三線の  
古製と云くべし  
美少年の男子の体之



浅葱尾の形琵琶  
初なり今と大異

東山樓身 空画

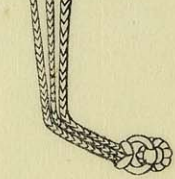
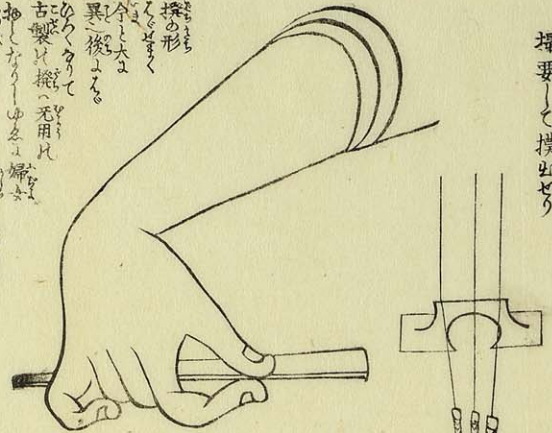
方治年間印本  
東海道名所記  
所載



方治の比  
くのかた形

寛永比の古画の  
様要として撰出せり

捺の形  
今と大  
異後よ  
古製は  
おしなり  
掃拭は  
はと



○寛永正保比  
比れ古画なり  
鼓弓は古製  
弓短小  
今と大  
異之  
和漢三才図會  
鼓弓始は南  
漢

和漢三才図會  
鼓弓始は南  
漢

○根緒は  
異之盲人へ  
昔は實朴と  
なり



骨董上編 中三



五、昔ハ男女ともに革足袋と用ゆ明曆比後革の價高く分りて木綿足袋と用ゆと  
 二、りまるといふ 秘室抄 寛永九年即本 富く若比奉とす糸より紫に比木綿たびま  
 八、頭中で頼りく「云く」とあれと寛永比比も木綿足袋分りては

○九はくーの文様 十七

慶安より万治寛文比比女の衣服は九はくー比文様おとくからとす

山の井 慶安元年刻

秋乃野比かー比比露也九はくー

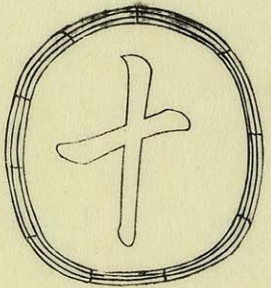
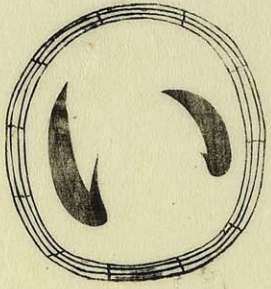
毘山集 慶安四年撰明曆二年刻

花くまうる日新や九はくー 安明

新續大鏡波集

新うつる回 毎比月や九はくー 呂芝  
 これ比かて比くー

万治寛文の比と盛後より江戸三浦屋比名妓薄雲身まじり後其甚かれより小袖と卓圍  
 又つりく出生比地信州流宿比或寺に寄附しより今こわくー 或人其文様を二ツ  
 臨しとすよりくーなる左よわくー是又万治寛文比比九はくーの文様比おとくからとす



地緋綸子紋紗綾形縹文様九はくーのいはは四十八文字并ふ一三比数字を  
 りより九の如く白く深ぬき文字は黒紫萌黄等比色糸とくより九のゆりのやちん  
 金糸とすてりより九は大小異同ありとす

九尽文様雛形二種

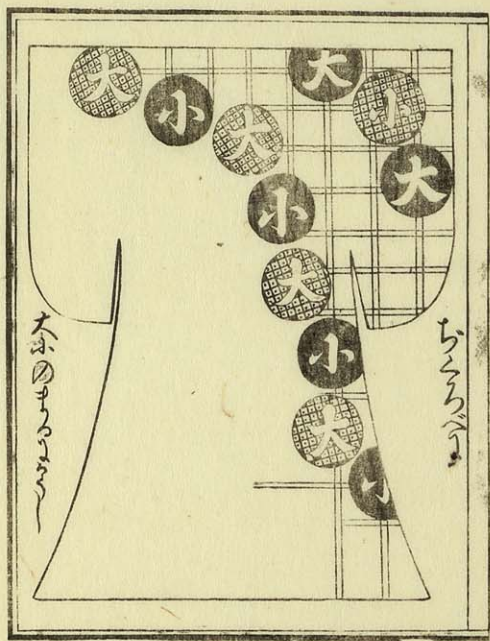
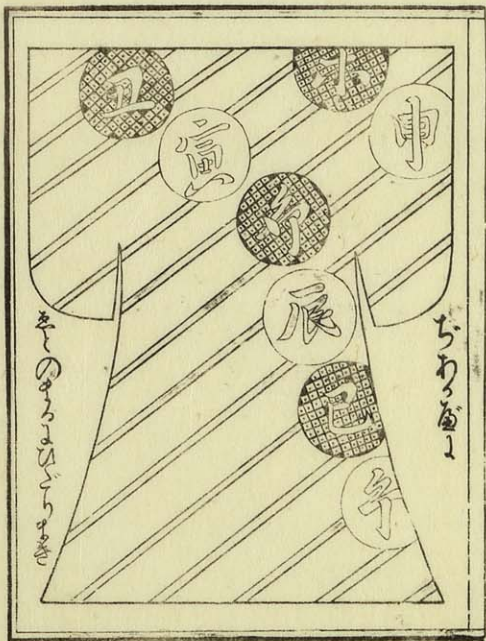
寛文六年  
印本  
新撰雛形  
所載

瓢水子浅井  
了意序

同書所載

右に草圖と此雛形と  
符合するものとを  
の流行と云ふ

○天和貞享時代の印本  
女重宝記といふ物の  
一の巻に一文様係れ  
九はく一とあり  
これを一様と云ふ









四五年前童話比出石とてクビてウミとウミと。童話考と名づけ一冊あり。

考れ足ざり石のまを。年ひさしくひねりぬ。さて隱笠隱蓑へ古歌もれりま  
すみれも。打出の小槌の事とまへさるもれとく。おれども **平家物語** 祇園  
女御の段「きぞ誠の鬼しおがゆ。かかりしりのへきとゆ。打出の小づらも  
べ」云々 **國衰記** 卷之九六ふも打出の  
小槌の軒足さう懸し同終  
の宝物集卷之一云「されど人比室あり。打出の小槌を能室よく侍るも。  
廣野ふかく居ろく人。家や。面白く人妻男や。遣能く人。従老馬牛食物衣物  
多し。心は任て打出くゆろく人。中界。能侍べれと云ふ。又人傍ろく指しと云  
探ハ打出の小槌へ目出さ室うそ有れも口惜まハ。拍と打出と樂くて居る  
程。鐘は声とて聞つれど打出の拍皆とて。失う事は惜しむる。されど  
目出さ居る。思へとも。左様の時、廣き野中。只独居て居る人。まそ  
味坊ろく。中界。昔より隱蓑の少将し申と拍話も。有増敷未父作てゆるとそ

**承** **酒陽雜俎續集** の委色を得る。金椎子と和漢相似

仙寺天  
受ノ四  
字語ヲ  
ナサス  
追テ報  
本雜事  
ヲ可考  
但ニ天  
提筆述  
各ツキ  
見ユ

狭衣。この中御志は、くくんのまを、り室。相集。このれみの少将の  
相話とて、ひやうを、と、れみのくく、相話とあり。今、侍り。○又、獲蟹  
合戦と云童話の原とあり。一、さ、ゆ、あり **義楚六帖** 四云。根本雜事云。有、隱人  
在果樹下坐被樹猴擲果。伏額忍之。不報。後有獵者。與仙人為友。來  
在樹下坐。擲如前。獵者怒。射之。致死。佛與「天受」かくろく。按、後、蟹  
合戦の語ハ此果樹と根として。枝葉とて、く、ゆ、あり。童話の原とて、ゆ、あり。ゆ、あり、  
仙説より、ゆ、あり。或ハ國史物語、ゆ、あり。或ハ漢土比故事、ゆ、あり。ゆ、あり、ゆ、あり、  
ゆ、あり、ゆ、あり。其、理、と、分、解、と、て、ゆ、あり。思、女、勸、懲、ハ、一、時、ゆ、あり、ゆ、あり、ゆ、あり、  
て、ゆ、あり、ゆ、あり。ゆ、あり、ゆ、あり、ゆ、あり。虎、鬪、和尚、の、異、制、庭、訓、ハ、今、文、化、十、年、ゆ、あり、ゆ、あり、  
五、百、年、前、の、書、ゆ、あり。祖、父、祖、母、の、童、話、ゆ、あり、ゆ、あり、ゆ、あり、ゆ、あり、ゆ、あり、  
思、と、ゆ、あり、ゆ、あり。今、ふ、疑、ま、る、不、思、議、と、ゆ、あり。ゆ、あり、思、考、ゆ、あり、ゆ、あり。他、日、童、話  
考、と、刻、ま、る、志、ゆ、あり、ゆ、あり、ゆ、あり。



此より傳へる。命をかくる。今へをせ。焼火とする。

○長崎柱餅并辛木 [十四]

世間胸算用卷之四。長崎の年暮の夜。条ふ「餅」其家くの。嘉録おまら  
せつとく。柱まらして仕舞ふ。一と大く撞ふ。うらつけて。正月十五日。比左義  
時。の。と。た。これ。何。ぶ。て。祝。ひ。を。ま。く。意。ふ。幸。ひ。木。と。を。横。ま。す。一。ふ。ま。ま。く。餅。の。そ。と。串。貝  
屋。危。難。子。あ。わ。ひ。の。塩。網。赤。い。う。昆。布。糖。練。牛。蒡。大。根。ニ。デ。日。ふ。つ。ふ。を。も。つ。餅。屋。乃  
の。此。木。お。つ。う。ま。ひ。て。竈。と。あ。き。つ。を。と。ま。ふ。大。晦。日。に。夜。ふ。入。れ。た。お。り。ひ。と。も。あ。ら。く  
ま。く。去。で。つ。ろ。う。ま。び。と。大。く。之。荒。垣。藪。ふ。の。左。當。年。れ。え。言。れ。海。う。潮。ま。よ。つ。こ。  
家。く。と。い。く。ふ。ま。り。ま。り。ね。つ。ま。び。一。れ。ふ。ゆ。ま。ぞ。う。ま。く。一。と。ん。え。さ。ら。り。これ。元。禄。年。中。比  
ま。り。之。長。崎。れ。ん。ふ。問。一。ふ。此。柱。餅。に。遺。風。今。も。あ。り。餅。と。延。命。袋。の。形。ふ。つ。ら。て。大。黒  
柱。ふ。打。つ。て。翌。春。お。つ。う。て。お。の。づ。く。落。ら。ぬ。ま。ら。て。あ。ぢ。ち。ら。う。ま。と。

○宗祇の蚊帳 [十五]

今俗ふ。と。え。と。の。や。の。ふ。ひ。虚。言。一。て。自。誇。ま。と。百。七。十。年。前。の。謗。よ。宗。祇。の。蚊。帳  
と。の。ひ。さ。う。宗。祇。法。師。し。か。か。ト。蚊。帳。ふ。麻。う。り。と。虚。言。し。て。誇。り。ま。ら。り。し。う。世。に。流。し  
な。り。し。と。也。

嵐山集 卷四 撰明曆二年刻

蚊帳 貞徳

以上右の集ふ。と。え。と。の。や。の。ふ。ひ。元。禄。の。西。鶴。か。ら。の。友。元。禄。十。二。年。刻。一。り。時。旅。宿。少。く。山。家  
比。ま。も。い。ひ。傳。へ。ら。ふ。や。商。人。集。り。て。今。宵。八。七。月。七。日。星。も。あ。ら。花。は。天。の。川。か。さ。り。の。け。り。を。も。つ。ら。の。や。

鳥。口。巻。と。ろ。く。あ。り。て。ま。う。と。星。乃。ま。り。ま。と。子。細。浮。れ。た。い。つ。も。も。あ。打。て。ま。あ。ふ。た。ふ  
か。れ。ぬ。人。か。へ。公。家。の。折。り。ま。も。の。を。我。い。ち。う。ち。あ。る。れ。と。一。と。連。歌。所。れ。宗。祇。法。師。諸。國。を  
修。行。し。修。し。時。人。れ。縁。い。ま。れ。ぬ。か。の。たり。東。海。道。岡。部。の。宿。を。相。宿。同。ト。蚊。屋。ふ。ぢ。う  
と。の。昔。物。語。と。し。云。く。人。此。今。も。あ。ら。う。ま。ら。う。く。し。う。と。流。れ。た。の。う。ら。い。で。あ。さ。つ。く。なり。

骨董集上編中之巻終